

# 第6分科会「里山と里海」

テーマ：里山と里海の現状を知り、それを脅かしている原因について考える

日時 平成20年5月31日(土)13:30~16:40

場所 いすみ市・農漁村体験案内所

参加者 84名

スタッフ 手塚幸夫、伊藤幹雄、中村松洋



## 趣旨

流域の自然環境・生物多様性の保全という観点から、里山と里海のつながり、水源域としての里山の現状などについて情報交換をする。さらに、報告を受けて、参加者と一緒に、さらに地域の人たちと一緒に問題解決に向けた取り組みやつながりについて考えたい。

## 内容

発表者(講演者)、所属団体

### ① 里海からの報告

「里海と漁業について」中村松洋(夷隅東部漁業組合)

### ② 人里から里山へ

「夷隅地域の野生生物について」大藪健(夷隅郡市自然を守る会)

「川と里…そして山へ(流域の視点から)」伊藤幹雄(夷隅郡市自然を守る会)

### ③ 里山を脅かす問題

「大多喜で建設が計画されている産廃最終処分場について」

永野昌博(堀内産業廃棄物処分場建設に反対する会)

「農場建設の名目で進められる残土埋め立てについて」

金井たまみ(木更津市民ネットワーク)



## 現状報告と結論・課題

里海からは、いすみ市の沿岸に広がる広大な磯根の自然環境と漁業資源について、山・川・海の間で考えることの重要性について報告があり、その上で、漁業者による資源管理の重要性が指摘されました。

人里と里山からの報告では、最初に、外房=夷隅地域の野生生物の現状と地域の自然保護団体による保護活動についての紹介がありました。



それを受けて、地域の自然・環境問題を流域という視点から捉えることの重要性が指摘されました。特に、水源域となる房総の森が荒れ竹林が拡大していること、それに伴い河岸に流竹木が停滞し、大雨が降るたびに海岸に大量に漂着していることなどが報告されました。



里山を脅かす問題としては、大多喜町で建設が計画されている産廃最終処分場の現状と反対運動について報告がありました。町議会でも賛否が二分したが、現在は町が赤道の使用を許可しないことで進まずにいます。木更津からは、新たなタイプの残土事業の問題が報告されました。

農業法人の名で、残土による埋め立てをする事業で、木更津市の農業委員会は絶対反対をしている中で、県の許可を得て建設が進められています。

農地を作るという名目さえあれば、残土をいくらかでも持ち込めるような抜け穴を認めたようなものであり、問題はきわめて深刻です。



## まとめ

比較的自然が残るとされてきた房総地域でも、里山の荒廃や生物多様性の劣化が進んでいることが報告されました。

課題解決に向けて、流域で、さらには山川海のつながりの中での保全と再生を考えることの重要性が確認されました。

また、残土産廃については新たな問題が持ち上がっており、地域の連携の必要性が改めて確認されました。

